

日本人と洗濯機（私のスケッチ・ブック（3））

著者	森 明子
雑誌名	洗濯の科学：生活環境の文化誌
巻	44
号	4
ページ	22-25
発行年	1999-11-20
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005886

日本人と洗濯機

国立民族学博物館

森 明 子

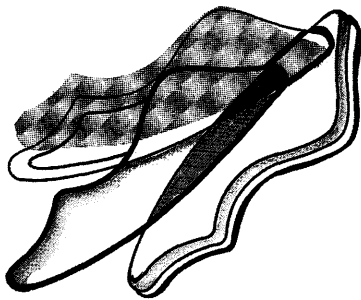
◆洗濯機のある場所

現在の私たちの生活で、洗濯機はなくてはならない家電製品といってよいだろう。下宿で1人暮らしをしている若者の中にも、洗濯機をもっている人は少なくない。私もアパート暮らしを始めたとき、洗濯機を買った。ところがそのアパートの室内には洗濯機を置くスペースがなくて、かわりにベランダに、洗濯機の高さに合った蛇口がついていた。

少なからぬ抵抗を感じた。私は無意識のうちに、洗濯機は屋内の床の上にあるものだと考えていたらしい。それは乾いた清潔な空間であり、これに対してベランダは、雨や埃にさらされる野ざらしの空間に思われた。

洗濯機は、屋内のくつろいだ空間に属する。近頃、テレビで松たか子が演じている洗濯機のコマーシャルは、このイメージをよくあらわしている。両親のもとに生活しているらしい年頃の娘が、おそらくはボーイフレンドと、夜の電話を楽しんでいる。彼女は、美しく磨かれてた床に座って、洗濯機に寄りかかっている。秋なら窓の外から虫の音でも聞こえてきそうだ。そこは、家の中で娘が1人きりになれる静かで落ち着いた空間なのである。

しかし洗濯機は、どこでもこのように心地よい空間に置かれているわけではない。ヨーロッパの都市では、洗濯機は、地下室などの、人が起居する空間より低いところに置かれる。



たとえばウィーンの集合住宅は、各階に数家族が住む5～7層の建物で、中庭やゴミ捨て場を共同利用する。建物の地下は洗濯場で、そこに10台前後の洗濯機と、ほぼ同数の乾燥機が並ぶ。利用者は、その集合住宅の住民に限られていて、使うときは、管理人からあらかじめ購入しておいた専用のコインを使う。日本人の目からみればコインランドリーに近いが、利用者が限定されていること、独身者だけでなく、家族生活をする人も共同の洗濯場を使うことが違う。洗濯機を所有している家庭もあって、その場合は、バスルーム内の一角に洗濯機を置くことが多いようだ。

◆家事の機械化

ヨーロッパの洗濯機は、洗濯時間が日本のものの2、3倍かかる。その理由は、前者が回転式であるのに対して、後者が噴流（渦巻

き) 式であるというシステムの違いにもよるが、もう一つの大きな要因は、前者が温湯を使って洗濯することにもよる。ヨーロッパの洗濯機は、あらかじめ設定した温度に水を熱する工程も備えた機械である。なぜヨーロッパの洗濯機が温湯を使い、日本のが使わないのかは、それぞれの消費者のニーズによる。日本人にとって、洗濯は水でするものであり、ヨーロッパ人にとって、それはお湯であるのだからである。そしてこのわけは、洗濯機導入以前の洗濯方法の違いによっている。

機械化とは、それまで人が行っていた作業を機械が代行することを意味する。とするなら、機械化がある地域におよぶということについて、二つのまったく異なる道筋が予想される。一方は、その地域で行われていた手順をふまえた機械があらわれることで、他方は、その地域でそれまで行われていた手順が無視され、捨てられることである。工業生産の場合、製品は地域を超えて消費されることを予定しており、合理性が最大限追求されて、その生産工程を問題にすることは少ない。しかし、家事にかかわる機械化の場合、その手順を、合理性だけによって変更することは容易でない。この場合、機械が文化を投影することが起こりうる。洗濯機は、そのような機械なのである。

◆洗濯機以前のヨーロッパの洗濯

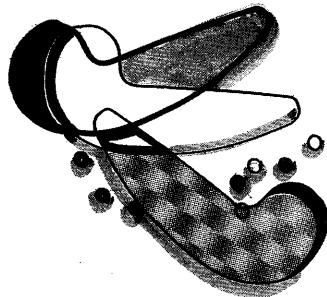
ヨーロッパで洗濯に温湯を使うことと、洗濯の場所を住空間から離れたところに置くことは連関していて、この点は、洗濯機以前から連続している特徴である。ヨーロッパの洗濯は、おそくとも18世紀以降、ずっと温湯を使っている。イギリス、フランス、ドイツなどの国々で、状況はほとんど同じだったようだ。

洗濯は大仕事で、洗濯をする日は、使用人

が午前2時ころから起きて、大釜にお湯を何度も沸かした。汚れた衣類をきれいにするには、叩いたり、石鹼水につけて煮立てたりしなければならなかった。このような大仕事をする日は、日常的な仕事ができなかったから、洗濯は頻繁に行われたわけではない。洗濯の回数は、できるだけ少なくすむほうがよかった。洗濯をどのくらいの頻度で行うかは、その家がどのくらい裕福であるかを示していた。裕福な家庭ほど、十分な数の衣類とリネンをもっていたから、洗濯をする頻度が少なかったのである。

18世紀、イギリスの富裕な家の主人が残した日記には、4～5週に1度、2～3人の洗濯女がやってきて、2～4日間かけて洗濯をしたという記録が残っている。20世紀初頭、ウィーンの市民階級の家でも、奉公人や洗濯女を使って、2～4週間に1度のわりで洗濯をしていたという記録がある。月曜日に始めて木曜日までかかっていた。

これに対して、貧しい家庭では、十分な衣類をもっていなかったから、洗濯の頻度は高くなった。1840年代、ロンドンの労働者家族を調査した結果によると、労働者家族の主婦は1人で洗濯をし、ほとんどが毎週月曜日に始めて3日目までかかっていた。人を雇えない主婦は、娘を使っていたらしい。1927年に行われたウィーンの調査によると、洗濯日に

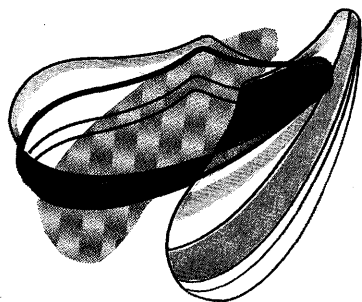


は、娘たちの約3分の1が、母を手伝うために学校を休んでいる。

◆きらわれる洗濯

ヨーロッパの人々にとって洗濯は、家事の中でももっとも好ましからざる仕事だったという。私たちには想像しにくいのが、火のそばで行う洗濯の感覚である。私たちは、洗濯仕事の厳しさを、寒さと水の冷たさで表現するのに慣れている。たとえば、『おしん』が雪の降る中、川で洗濯するシーンである。しかしヨーロッパの女性は、これとはまったく別のことを、洗濯の困難としてあげる。もっとも始末の悪いのが、石鹼水を煮たてたときの空気の悪さである。煮立った鍋からでる水蒸気と、石鹼の粉が相乗効果をなして、不快なおいする空気が狭い空間にたちこめる。洗濯についての記録を見ると、まず第一に女性が口にしてしていることは、あわだった石鹼水の「吐き気をもよおすにおい」である。ただし湯を使うのは、石鹼を使う段階に限られている。すすぎになると、洗濯物を水場まで運んだ。水場は泉であったり、川であったりした。ヨーロッパの女性たちが、手を切るような冷水での仕事を逃れていたわけではなかったのである。それでも、冷水の厳しさより、火のそばで洗濯をするつらさのほうがはるかに大きかったわけだ。

洗濯物が重くかさばり、重労働であることも日本と違う。『おしん』が手に血をにじませて洗ったのはおしめであるが、おしめを初めとして、日本の繊維は軽量で柔かい。ヨーロッパの洗濯物は、ほとんどがリネンで、ごわごわとしていて重い。シャツやテーブルクロスなど大きいものが多い。また、働く男性のシャツもリネンで、1週間着続けた衿の汚れなどは、かんたんに落とすことができなかったという。これらをしばるときも、さら



に重労働だった。

◆ウォッシュハウス

さて、湯を使うヨーロッパの洗濯は、火のないところではできない。洗濯専用の建物を、英語でウォッシュハウス、ドイツ語でヴァッシュキュッヘという。すべての家庭で別棟の小屋をもっているわけではなかったが、洗濯は専用の空間で行うものだった。私は、オーストリアのチロル地方で、現在は使われなくなった洗濯小屋を見たことがある。小屋の中には土間に火を焚く口がしつらえてあって、その上に大釜が置いてあった。小屋の隣には、パン焼き用の釜が接している。小屋でない場合は、地下室に洗濯専用の釜を設置している。一定の場所に釜を置くのは、釜を焚いて出る煙を、煙突に集めるための工夫である。

ヨーロッパで、洗濯専用の空間を持たないことは、貧しさを意味した。一つの部屋で生活のすべてを行っていた家庭がこれにあたる。そのような家庭では、ベッドも台所も同一空間にあり、身体を洗うのも洗濯をするのも、洗濯した物を干すのも、この同じ空間で行っていたのである。どのような状況が想像できるだろうか。そして、毎日のように洗濯をすることも、着替えを持っていない最貧層の家庭だった。

◆洗濯機の登場

このような洗濯を代行してくれるものとして、初めの洗濯機が発明されたのである。発明を促したのは、洗濯をする家事奉公人の不足という社会的な状況だった。家事奉公人が早くから不足したアメリカが洗んじ、イギリスでは第一次世界大戦後から使われるようになる。ただし、電気洗濯機が普及するには、動力源としての電気が敷設され、水と湯の供給、排水管が整うのを待たなければならなかった。イギリス（連合王国）の全家庭の洗濯機保有は、1943年33.6%、'58年29%、'69年64%、'80年77%と着実に増えていった。

しかし日本では、洗濯機は違う風によって普及した。日本の洗濯機の一般型になったのは噴流（渦巻き）式で、ヨーロッパの回転式とは異なる。開発当初のそれは、安価で小さく、1度に洗濯する量も少ないという特徴があった。その噴流式洗濯機第1号は、三洋電機によって1953年に製造された。同社はこの年を電化元年と名付ける。8年後の1961年、洗濯機の普及率は、全世帯の50%に達した。イギリスの普及と比べると、その急速なことがよくわかる。イギリスにおいてはインフラの整備が普及の条件になったが、日本の急速な普及には、日本人のもとももっていた洗濯のあり方と、さらに、時代の意識とでもいうものがかかわっていた。

◆日本人と洗濯機

戦後の日本人にとって、電気洗濯機をもつことは、豊かさの指標になったといっただろう。家庭電化は、戦後のデモクラシーと重なった。それは主婦が「奥様」として描かれるようになった時代のことである。このころ三洋電機の洗濯機のコマーシャルに木暮実千代が、ナショナルの家電製品のコマーシャルに高峰秀子が起用された。洗濯機、冷蔵庫、

白黒テレビがあわせて「三種の神器」といわれた時代の到来である。

宝物として日本人の家の中に入ってきた洗濯機は、住空間の中でたいせつにされた。それは、蒸気を出すことも、石鹸の泡立つ胸の悪くなるにおいを出すこともなかった。日本人にとって洗濯は、住空間で行ってもいっようなかまわない作業だったのである。ベランダに洗濯機を置くことに私が抵抗を感じたのは、おそらくこんな歴史が背景にあったためだろう。これに対して、ヨーロッパの洗濯機は、湯気をたてる機械装置であって、家族生活の内側に位置づけられるものではない。

このような認識は、はっきりと意識されているものではない。しかしそれは、洗濯という行為を毎日の生活のルーティンに埋め込んでいる日本人と、現代でも、洗濯は週に1度だけの特定の仕事として位置づけているヨーロッパ人の意識の底に、沈潜しているように思われる。

